Ｎｏ．４４７【２０２１年３月１２日配信】

高木啓太郎と高木東園（担当：鈴木）

本町にある高木恭造の解説板

こんにちは！　歴史資料室の鈴木です。

今回は、館内展示「あおもりのお医者さん」で取り上げた明治 42 年（1909）の『東奥日報』特集記事「青森のお医者様」から、高木啓太郎と東園の親子をご紹介したいと思います。

高木啓太郎は方言詩集『まるめろ』で知られる眼科医の高木恭造の父、東園（とうえん）は『白昼の死角』などの作品がある推理作家の高木彬光の父で、また恭造の兄にあたる人物です。

高木家は、江戸時代の終わり頃から青森の町で代々医師を続け、啓太郎という名前を襲名してきました。初代の高木啓太郎は秋月藩（現在の福岡県）の藩医でしたが、若い頃に訳あって蝦夷地へ渡ろうとし、その途中で青森の町でけが人を治療しました。すると、その腕が評判となり青森で外科医として開業することになったのだそうです。

2 代目・3 代目の啓太郎は他家から婿養子に入った人で、「あおもりのお医者さん」で紹介されている啓太郎は 3 代目にあたります。

3 代目啓太郎は、安政 2 年（1855）に弘前藩士の子として生まれました。藩医を務めた小野元秀のもとで医術を学び、のちに請われて高木家を継ぎました。米町（現本町 2 丁目付近）に医院を開き、とくに「脚気（かっけ）と痔なら高啓さま」といわれて繁昌したそうです。脚気は、現在ではあまり聞かない病気ですが、江戸時代から昭和戦前まで罹患する人が多く、結核と並んで二大国民病ともいわれていました。

「青森のお医者様」には、啓太郎が「昆布晶を発見精製」し中央まで名が知られているとあります。昆布晶とはどんなものかわかりませんが、診察以外にも何か研究していたと思われます。また、詩吟や菊づくりなど趣味を楽しんだ人でもあったそうです。

4 代目にあたる東園は、3 代目啓太郎の子として明治 11 年に生れました。立教大学に入学して野球の選手をしていましたが、のちに千葉医専（現千葉大学医学部の前身）に進んで内科医となりました。ただ、「襲名は古い」といって啓太郎は名乗りませんでした。

「青森のお医者様」では、東園を「厳父の脚気と共に患者の評判好く」また「多芸家なりとの噂」と紹介しています。東園もまた趣味を楽しんだ人のようで、その中でもローラーカナリアやナキウズラなど小鳥の飼育に力を入れていました。大正時代から昭和初期にかけて小鳥の飼育が流行し、これにすっかりはまってしまったようです。『青森県総覧』（1928 年　東奥日報社）には、昭和 3 年（1928）9 月に東奥日報社が開催した「御大典奉祝並に本社創業四十年記念青森県文化象徴展覧会」に 7 羽の小鳥を出品したことが記載されています。

東園は昭和 11 年に亡くなりましたが、その子どもたちが医師になることはなかったようです。

※今回のトリビアは、『青森県人名大事典』（1969 年　東奥日報社）、高木晶子著『思い出大事箱～父・高木彬光と高木家の物語～』（2008 年　出版芸術社）などを参考にしました。